

## 各地の取り組み 熊本県人吉市

# 地域全体のきずなの向上を目指して

人吉市保健センター 保健師 松本 芳枝

### はじめに

私は、熊本県の人吉市役所で働いている6年目の保健師です。学生時代、保健師の実習に行き保健師の役割が見出せず、自分には向かないかもしれないと思い2年間腎臓・消化器・内分泌代謝内科がある病棟で看護師として働きました。その後両親の勧めもあり、今から6年前に実家近くの市役所に就職し、最初の3年間は高齢者の担当をしながら毎日毎日地域に住む高齢者の家を訪問する日々でした。病棟で看護師として働いていた時代から高齢者の方と接する機会も多く、保健師として市役所に就職してからも高齢者の家庭を訪問する仕事だったため、戸惑いもなく先輩の保健師の方と一緒に訪問する看護師の方に地域に出ることの大切さを教わり、地域の方と接することで地域の課題も少しずつ見えてきました。

家庭訪問をすると、誰かの支援を必要としている高齢者に遭うことも多く、その高齢者の方の子どもさんに連絡しても支援を拒まれるということもありました。そういう時は、「実の子どもなのに、親が心配ではないのだろうか？今まで色々あったかもしれないが、親が大変な状況を見捨てるなんて、なんと薄情な子どもなのだろう？」と思うこともしばしばありました。高齢者の方には私たちの訪問を楽しみにして下さることも多く、私は高齢者の方に関わる仕事にとってもやりがいを感じていました。そのため、やっと色々なことがわかり始めた3年目の終りに母子保健の担当へ異動と言われた時には、正直頭が真っ白になりました。なぜなら私は2人姉妹の下で、自分より年下の子を世話した経験もなく、子どもは好きだけれどどう接してよいのか分からなかったからです。また、どちらかと言えば同世代の人より高齢者の方の方が話しやすいと思っていましたし、何より子育て経験のない私が、子育てをしている方の相談にのれるのかととても不安に思っていました。

### 母子保健に携わって感じたこと

そんな自信のなさを救ってくださったのは、先輩保健師の「芳枝ちゃんは高齢者だって歳をとってなくても支援してこられたじゃない。だから母親じゃなくてもお母さんを支援していくことはできるよ」という言葉でした。その言葉を胸に、1年目は何が何だか分からず、前任者から引き継いだ仕事をただ黙々と、同じことを何度も何度も周りの方に聞きながらやっていました。特に、本市では発達障がい関係の事業に力を注いでいました。そのため、時には保護者が受け入れ難いような子どもの状況を伝えることもあり、立腹されたり、不安にさせたり、拒否されたりと自分は何の為に、



親子ふれあい教室

誰の為に仕事をしているのだろうかと思うこともありました。

2年目を迎える頃から、「親はわが子と向き合うことがどれだけあるのだろうか、わが子のことをどれだけ考えているのだろうか？」と思うことが多くなりました。

### 地域の現状と課題

本市は、周囲を山に囲まれた盆地です。昔から農業や林業などの第1次産業も盛んでした。しかし近年徐々に人口は減少し、平成22年11月には人口が3万6千人を切りました。また、平成24年7月には高齢化率が30%を超えています。事業所も少ないため、圏域全体が雇用問題を抱えています。高齢者が多いため昔ながらの地域のつながりも多少は残っていますが、子育てをしている親たちは自分たちの生活をしていくのが精一杯といった感じで、両親共働きでどうにか生活をしている家庭も少なくありません。離婚率は年々上がっておりシングルマザーでの出産も珍しくない状況の中、母子手帳を貰いに来る母の中には子どもができたときの気持ちを「何とも思わなかった」や「失敗したと思った」を選ばれ、そのような気持ちの中で出産し子育てをしていく母たちを見ながら、私たちの仕事は何なのだろうと悩む日々でした。

また、小学校や中学校、中には高校になって不登校や適応障害と思われる行動がみられ、親が相談してこられるというケースも年に数件受けるようになりました。仕事をする中で、親にアプローチしていきたいが、母子手帳を取りに来られた方に対し、今後の生活が今までとは変わってしまうことをどのように伝えたら良いのかを考え、まずは妊娠から出産後1年までの年表のようなものを作り、出産後の心身や周囲の環境の変化が分かるようにしました。ただ、母子手帳を貰いに来る前

## 子育て力や家族の力を上げるものがBPにはあった

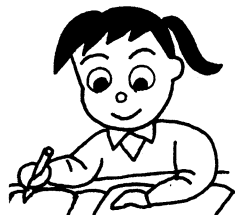
の人にどうアプローチするのかという問題もあり、そういった方を集めるのは難しいので、まずは子どもに対し、今後自分らしく生きていくための力や知識を身につけていってもらってはということを考えてみました。ただ、そういった場合教育委員会や学校との連携が不可欠です。中学校に対しては思春期講演会というもの保健センター主催で行っていたため、講演会で伝えていくのは可能だったのですが、学校側との思いの違いもあり実現は難しいものでした。また、他の地域でも同じだと思いますが日々の保健師業務に追われ、何かしたいという思いはあっても新規事業を立ち上げるほどのパワーが残っていなかったということもありました。

また、先ほども書きましたとおり本市では子どもの発達に力を入れていました。発達を学ぶ中で、発達を知るということは、何か“できた”“できない”ではなく、今その子の発達がどの段階で、何をどのように理解しているか、どのように伝えらると分かるのか、といった「なぜ?」「どうしたら?」ということに目を向けることではないかと思うようになりました。そういう視点をどうしたら親に持ってもらえるのか、子育てとは発達を見つめる、見守るということを親にどう理解してもらうかということも課題でした。

### BPに出会って

本市では心理士による発達相談を定期的に行っています。その心理士の方が本市のNP (Nobody's Perfect) ファシリテーターもされています。日頃から子育て力や家族の力を上げるためにはどうしたらよいのだろうと悩み相談していたところ、その方から「BPっていう講座があるよ」と紹介を受けました。内容を詳しく聞くと、子どもを見つめる・見守る視点や、基本的な関わり方だけでなく親同士のつながりも期待できるというもので、まさに求めていたものでした。また、私たちがファシリテーターをすることで相談しやすい保健師にもなるのではと期待し、受講することを決めました。受講希望者が集まれば本市で開催も可能ということになり、圏域の保健師の方にも声をかけ、平成25年2月2・3日での開催となりました。

開催が決まりKKIの事務局と連絡をする中で、「しっかりテキストを読みこんできて下さい」という言葉に正直大変なものに申し込んでしまったかとも思ったこともありましたが、実際資料が送られてきて同じ系の保健師と、最後まで読みこめるのかと不安になりました。しかし、テキストを読み進めるうちに、ここに書かれていることは自分たちが求めていた「親に考えてもらう子育て」「“なぜ?”に気づく子育て」につながる



のではないかと、「親自身の力を高めること」につながるのではないかと思いました。それと同時に、私は親に求めることばかりをしてきたのではないかと思いました。それまでは、親になったのだからしっかり子育てをするのは当たり前、自分のしたいことは我慢すべきだと思っていました。しかしBPの本の中に親を責めるような内容は全くありませんでした。親も1人の人間ですし、自己実現があって良いのだ、ただ子どもがいる前と後では実現したい内容は変わる場合があるということを知りました。研修はテキストを読んでいても楽しみになっていましたし、参加者がほとんど知り合いという状況でしたので緊張もなく参加することができました。

2日間の研修では、今まで自分の気持ちを押しつけていたことに気づきました。職業柄なのか性格なのか、話をしている人の考えを先取りして、「こうでしょ」とか「こういうことを言いたいのだよね」「こうしたら」と言うてしまうことが多かったので、ファシリテーターとしての役割を学び、参加者の気持ちを聴くということが難しく、セッションをやってみたときは時間を持て余してしまいましたし、「聴く」＝「黙ってしまう」になってしまいました。本当の意味での聴くことを再度学ぶことができたと思います。先日10年以上前から交流のある友人と食事に行った時、「人の話を聞けるようになったね」と言われました。これはBPに出会ったからこそだと思っています。

### 今後に対する大きな期待

今回本市は14名が養成講座を受けました。本市の出生数は年間約300人で、おおよそその半分150人が第1子です。私たちは、その150人全員の母親に平成25年度からの新規事業としてBPを受けてもらおうと考えています。幸い、母子担当の保健師だけでなく他の系の保健師や、別の課に所属する保育士やサポーターの方も受講をしているため、みんなで考えながらやっていけることと1人に係る負担も少なくできると思っています。募集は、新生児訪問で全戸訪問を行っていますのでその時に紹介をして参加者を募る予定です。また、本市の広報誌にも紹介をしたいと考えています。日程については調整しているところですが、平成25年の5月頃より月1回程度で開催をしてく予定です。

研修の最後に講師の原田正文先生より「人吉球磨地域の出生数で果たして開催が可能なのかと考えたが、出生数が少ないからこそ全員受講ということも可能であるし、それを達成することで2～3年後の地域の子育て力の基盤が上がるでしょう」と言われました。今はこのことに期待し準備を進めています。また、それが数年後に家族のきずなが強まることとなり、数十年後の介護力の向上につながると思っています。